



ブケディア地区の女性たち。都市と都市の間において経済成長から取り残されているのが、この地域の課題だ

リン氏が、1993年、友人たちと共に立ち上げた、農家の収入向上と女性の自立支援を目指す団体だ。函館在住のウガンダ人、ドミニク・バゲンダさんが帰国時にPKWIを知り、その活動に共感して協力するようになった。岡田さんにPKWIを紹介したのもバゲンダさんだ。

岡田さんは、外務省のNGO海外スタディー・プログラムを利用して2013年にウガンダを訪問。3カ月間、PKWIで研修を受けたことがきっかけで、バゲンダさんと共にPKWIを支援する会を立ち上げた。

PKWIは、農業支援が中心なので、地元の人やコミュニティとの連携や、自分たちの力でプロジェクトを進める体制は整っていた。PKWIを支援する会ではその基盤を活用して、女性の自立

を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子どもを持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

草の根で広がる支援の輪 子どもたちの勉強のために

岡田さんが気に掛けているのは、女性たちが洋裁教室で学んでいる間、その子どもたちの世話をしている少女たちのことだ。少女たちは、ベビーシッターの仕事に時間を取られるため、結果的に学校に行くことができない。母親たちが

を中心に協力を進めている。軸となるのは、洋裁教室による職業訓練だ。

洋裁教室は、3カ月間のコースを年3回開催し、これまでに20人が卒業した。しかし、技術を身に付けても、収入につなげなければ自立はできない。そこで始めたのが、レンタルミシン事業と、地域の学校の制服作りだ。

昨年からは始めたレンタルミシン事業は、女性たちにミシンを貸し出して、マキエットなどがたくさん集まる場所で服の修繕などを請け負い、収入につなげてもらうプロジェクトだ。だが、ミシンを移動させるのにもお金がかかる。そこで、学校の制服作りを請け負うことにした。ウガンダではどの学校にも制服があるので、安定した需要が見込めると考えたのだ。良い品質の布で、丁寧に、質の高い制服を作る。収入は洋裁教室とレンタルミシン事業の運営費に充てると同時に、女性たちにお金が稼げることを実感してもらっている。

バゲンダさんは「お金や物資ではなく、道具と技術の訓練を提供することで、女性たちが自分自身で問題を解決する手助けをしたいのです」と話す。

自立できれば、少女たちも学校に行くことができるようになるのでは。岡田さんは、そんな変化にも期待している。

現在、公立はこたて未来大学で教壇に立つバゲンダさんは、毎年、学生を連れて現地へのスタディーツアーを行っている。昨年9月には、ブケディア地域でも特に貧しい村の小学校でボランティア活動を行い、給食を作って子どもたちに振る舞うと同時に、地元の有識者を招いて現状を視察してもらった。

「その村の学校は、木と土で簡易的に作られたもので、雨が降ると水が入ってきて授業が続けられなくなってしまう。また、子どもを学校に通わせるより、近くの沼で魚を捕ってお金を稼がせたいと思っている親もいます。現状を変えるためには、ただ給食を作ってあげるだけでなく、地元の人々が教育について話し合う機会が必要だと思えます。スタディーツアーに参加

し、現在はPKWIを支援する会の一員として活動している岡崎航さんと西谷謙吾さんは、ウガンダでの経験をそう振り返る。

バゲンダさんは「地元の有識者が村の現状を見たことで、自治体が校舎の整備に乗り出しました。日本のボランティア活動がウガンダを動かし、一方で日本からの参加者も新しい価値観を学んでいます。少しでも多くの人に、アフリカを自分の目で見てほしいと思います」と、活動の意義を強調した。

岡崎さんは、この春にも洋裁教室の現状調査のために現地を訪問し、寄付で集まった文房具をブケディアの小学校に届けた。教科書も筆記用具も足りない村の子どもたちの勉強を少しでも支えたいという。

女性や子どもたちが自立して、幸せな生活を送り、夢のある未来を築ける日を目指して、支援は続く。

し、現在はPKWIを支援する会の一員として活動している岡崎航さんと西谷謙吾さんは、ウガンダでの経験をそう振り返る。

バゲンダさんは「地元の有識者が村の現状を見たことで、自治体が校舎の整備に乗り出しました。日本のボランティア活動がウガンダを動かし、一方で日本からの参加者も新しい価値観を学んでいます。少しでも多くの人に、アフリカを自分の目で見てほしいと思います」と、活動の意義を強調した。

岡崎さんは、この春にも洋裁教室の現状調査のために現地を訪問し、寄付で集まった文房具をブケディアの小学校に届けた。教科書も筆記用具も足りない村の子どもたちの勉強を少しでも支えたいという。

女性や子どもたちが自立して、幸せな生活を送り、夢のある未来を築ける日を目指して、支援は続く。



服の直しなどの針仕事を引き受けて収入につなげ、女性たちの自立をサポートするのが、現在の目標だ

女性たちが作り上げた型紙。これを使って小学校の制服が作られる



コンテナを改造して作った教室兼作業場。ミシンは昔ながらの足踏み式だ



収入のない女性たち どうすれば自立できるか

アフリカ東部の内陸に位置するウガンダ。4000万人弱の人口を擁するこの国は、近年、サハラ以南アフリカでも順調な経済成長を記録している国の一つだ。しかし、その恩恵が全ての人たちに平等に行き渡っているとは限らない。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子ども

を持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子どもを持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。



国際協力の担い手たち

PKWIを支援する会 ミシンで作る女性の自立

多くの女性たちが若くして結婚したり、子どもを産んだりしているウガンダ。女性が生計を立てる手段が少ないため、意に沿わない環境での生活を余儀なくされる人も多い。ケニア国境に近いウガンダのブケディアでは、洋裁教室を通して女性たちの自立支援活動が展開されている。